

## ルーブリックを活用した介護実習評価の導入と妥当性の検証

○ 城西国際大学 林 和歌子 (005062)

キーワード：介護実習 評価 ルーブリック

### 1. 研究目的

介護福祉教育に代表される社会福祉専門職教育において、実践力向上のために実習教育が重要であることは言うまでもない。(佐藤 2018) しかし同時に介護福祉実習の評価については、支援・援助の内容が対象者の状況に依存していることや、多岐にわたるスキルの獲得が必要であることなどから学習成果の数値化が難しいことなどから、←明確に学生が実習で身に付けた力を評価することの困難性が指摘されている。(工藤ら 2015)。そこで筆者は、2014年より実習指導者の協力のもと、ルーブリックを活用した評価指標作成のために検討を重ねてきた。(林、大内 2017) そして一定の検証を踏まえた介護実習評価指標 2 版を用い、2018年度の「介護実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の実習評価で導入を試みた。本研究は2018年度の実習評価結果とその評価の内容との関係を分析し、評価内容の妥当性の検証と今後の評価指標及び評価基準の改善点を明らかにすることを目的としている。

実習評価にルーブリックを導入することは、数値化しにくいパフォーマンスの評価が可能となり、一貫性と公平性が保たれるとともに、学習目標が明確になり段階的に継続して活用できる。さらに教員と実習指導者が積極的に実習内容の明確化に取り組むことで目標養成すべき専門家像が明確になり、教育内容の整理・充実を図ることにも活用しうるものである。

### 2. 研究の視点および方法

#### (1) 調査対象

城西国際大学福祉総合学部福祉総合学科介護福祉コースに所属する学生のうち、2018年度に『介護実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（後期集中・2又は4単位）を履修した36名（Ⅰ12, Ⅱ10, Ⅲ14）の「実習評価表」と「介護実習評価指標第2版」である。そのうち記入漏れを省いた34名分を対象に検討を行った。介護実習評価指標については、実習担当者に実習評価を行う際の基準にするとともに、学生へのフィードバックのために評価者が評価した点について、該当する評価指標と評価基準に照らし合わせた内容の記述箇所に印をつけてもらうよう依頼した。なお、2018年度に介護実習を依頼した施設は18施設（特別養護老人ホーム9, 認知症対応型通所介護1, 介護老人保健施設4, 障害者支援施設5）である。

#### (2) 解析方法

15項目の評価指標について、それぞれのルーブリック評価内容の記述に付いている印と実習評価表の評価について分析を行った。

### 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守した。また、調査を行うに当たり学生と実習施設長に対し、研究目的・方法、結果データの取り扱い、個人情報の保護、自由意思による

参加等について説明をおこない、同意を得たうえで行った。なお現在城西国際大学研究倫理委員会に審査申請中であり 2019年5月末に承認を得る予定である。

#### 4. 研究結果

15項目の評価指標について、それぞれのルーブリック評価内容の記述に対する印の有無と実習評価表の評価について度数を求め、学年ごとにクロス集計を行った。(Table 1)。

(Table1)実習段階ごとの実習評価とルーブリック評価項目の比較  
:評価指標「(1)利用者との関係づくりができる」

	実習評価	人数	基礎的なレベル		十分な基準に近づいている		十分な能力のレベル	
			(1)名前を覚える	(2)話しかける	(3)多数と関わる	(4)相手に合わせる	(5)受容	(6)双方向のコミュ
実習段階1	A	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)
	B	8	6 (75.0%)	7 (87.5%)	5 (62.5%)	8 (100.0%)	6 (75.0%)	3 (37.5%)
	C	1	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
実習段階2	A	5	5 (100.0%)	5 (100.0%)	4 (80.0%)	5 (100.0%)	4 (80.0%)	3 (60.0%)
	B	3	3 (100.0%)	3 (100.0%)	3 (100.0%)	3 (100.0%)	1 (33.3%)	3 (100.0%)
	C	2	2 (100.0%)	1 (50.0%)	0 (0.0%)	1 (50.0%)	1 (50.0%)	0 (0.0%)
実習段階3	A	8	7 (87.5%)	7 (87.5%)	7 (87.5%)	7 (87.5%)	7 (87.5%)	3 (37.5%)
	B	4	4 (100.0%)	4 (100.0%)	4 (100.0%)	2 (50.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)
	C	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	0 (0.0%)	1 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
全体	A	14	13 (92.9%)	13 (92.9%)	12 (85.7%)	13 (92.9%)	11 (78.6%)	7 (50.0%)
	B	15	13 (86.7%)	14 (93.3%)	12 (80.0%)	13 (86.7%)	9 (60.0%)	6 (40.0%)
	C	5	5 (100.0%)	3 (60.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)

#### 5. 考察

ここでは評価指標「(1)利用者との関係づくりができる」について述べる。クロス集計の結果、「(3)不特定多数の人と関わる事ができる」「(4)利用者に合わせたコミュニケーションができる」「(5)利用者のあるがままを受容することができる」「(6)利用者との双方向のコミュニケーションができる」については、高く評価できるA評価になるに従い評価項目に印のつく割合が高くなる傾向であるのに対し、「(1)利用者職員の名前を覚えることができる」はA,B評価よりC評価の印の付く割合が高くなり、「(2)挨拶や自己紹介など、実習生から話しかけることができる」についてはA,B評価の印の付く割合はほぼ同じであった。各段階においては、実習段階Ⅱはどのレベルにおいても学生全員に印が付く項目が複数あるのに対し、実習段階ⅠのB評価と実習段階ⅢのA評価については全員に印が付いた項目が少なく、印が分散して付く傾向が見られた。このことから実習段階によって実習期間や内容、到達目標が異なることや、実習Ⅰは初めての実習のため学生の生活経験等が実習中の行動に影響しやすいこと、実習Ⅲは「介護過程の実践」の取り組み状況が評価者の付ける基準に影響することなどが示唆された。さらに調査結果を精査し実用に向けて検討を重ねたい。

参考文献：

- 佐藤 亜樹(2018)「社会福祉相談援助実習が学生の共感性 (Dispositional Empathy) に与える影響に関する予備的研究」(2018)松山大学論集,第3巻第3号, p155-181.  
 工藤雄行、山口かおる (2015)「本学における介護実習評価の特徴と課題：実習施設評価と学生自己評価の比較を通して」弘前医療福祉大学短期大学部紀要 3(1), 95-102.  
 林和歌子,大内大内善広(2017)「ルーブリックを用いた介護実習評価法の開発」第26巻 第3号福祉総合学部 pp.37-50.